

(5) 『子供の科学』と『小学生全集』

加藤の読書生活は幼児期の病床に始まる、母織子が語り聞かせをしたことは前章に触れた。またたくまに字を覚え、みずから読むようになった。何を讀んだかについて詳しくは分からない。小学生のときに讀んだ雑誌や書籍として『子供の科学』と『小学生全集』を挙げている。

『子供の科学』は、科学評論家原田三夫（1890—1977）が編集に関わった雑誌で、1924（大正13）年に創刊され今日も刊行され続けている。この雑誌を加藤は定期購読した。この雑誌によって「自然科学を学んだのではなく、世界を解釈することのよろこびを知ったのである」「世界が解釈することのできるものだということ、世界の構造には秩序があるということ」を学んだと加藤はいう。これもまた加藤が長いあいだ基本とした世界に対する態度である。

一方、全88巻の『小学生全集』は、菊池寛が編集し、芥川龍之介が協力した読み物百科事典風全集であった。この全集を全巻買って讀んだという。なかでも加藤は音楽学者である兼常清佐に興味を抱いた。兼常は「ピアニスト無用論」など挑発的言辞を弄したことで知られる。しかし、小学生に対して、ベートーヴェンのピアノ曲を語り、シューベルトの歌曲を勧めるのである。小学生でシューベルトの歌曲の真価を理解できる人は、いたとしてもごく稀だったろう。加藤は兼常について「彼がなにをいっているのかほとんど全くわからなかったが、（中略）彼がみずから感動し、みずから考え、諧謔を弄し、皮肉を放ち、攻撃し、防衛し、要するにその本のなかで生きているのだ」と知ったのである。のちに加藤は、兼常の文章は文学であると位置づけるのであった。

第2部 尋常小学校時代 第2章 優等生——尋常小学校時代の加藤周一

(写真：『子供の科学』を編集した原田三夫(左)、小学生全集第67巻『音楽の話と唱歌集』表紙と大扉(兼常清佐著))

